

まっつて一週間ほどすると、腰が痛い、足のかかところが痛い、足の腿が痛いという子が多くなります。不思議なもので、こうした子どもたちも、五月を過ぎる頃になると、足や腰の痛みも消え、かつまた、通学そのものが苦痛でなくなってくるのです。

山村の新緑は、子どもたちの心に安らぎを与えるのでしょいか。帰宅の道もそれほどあくせくと歩かず、周囲の景色を楽しみながら歩をすすめるようになるのです。カッコー鳥がなくなのもこの頃です。

だいたい、都会の子どもは、朝はのんびりしていて、「さあ、さあ、はやくしなさい」と急ぎ立てることが多いのですが、帰宅の際は、これと反対にとてもはやく、一目散に家に向かって歩きます。これは、山村の子どもとは逆で、大変興味のあることだと思っているのですが、都会の子どもの場合、一つには、帰路、ぶらぶらしていると誘拐されるかも知れないといった都市環境が習慣化したのかもしれないです。

この子どもたちも二学期に入る頃には、歩くことの苦痛をすっかり忘れ帰路の道くさを楽しむようになります。

山村留学の子どもたちは、数軒の農家に分宿して、そこから学校に通うのですが、奥の部落に分宿した子どもたちは距離がありすぎるということで、途中まで村のスクールバスが迎えに行くことになっています。

今年の三月のことでした。二年継続して留学するという子どもから「希望しなければ、バスに乗らなくてもいいか」という質問を受けました。理由としては、体を鍛えるためということと、それに、歩いた方が楽しい、ということでした。この話をきいて、私は他の子どもとの関係もあることゆえ、一存では決めかねると思い、私は親しくしている村の人に尋ねてみました。その人の話をそのまま書きます。

「まったくだ。このぐらいの道のりだったら、歩いた方が、足がじょうぶになるし、楽しいものだ。おれたちのころは、もつと遠いところの子どもだって文句言わずに平気で歩いたものだ。それに比べりゃー、今の子どもたちはぜいたくだよ。ちよつと遠いとすぐ車だという。そのかわり、アケビをとったり、

ワラビをとったりする楽しみはなくなつたわけだ。

だいたいおとなが悪いだ。分校が合併する条件として、スクールバスの送迎を要求する。そして、子どもの意志とは関係なしに、みんなバスに押し込んでしまう。その方が、子どもによくしてやっているような氣になつてゐるんだから」

私は、この話をきいて、いろいろと考えさせられてしまいました。この村の、スクールバスのなかつた頃の子どもと、スクールバスに乗っている今の子どもとでは、こと通学ということに限つて考えた場合、どちらが、心の豊かさを持ち得たであろうか、と。今日の日本人は、物の面からいえば、本当に豊かで恵まれています。特に戦前の様子を知っている者にとつては、この思いはひとしおです。

しかし、物が豊かであるということは、「心の豊かさ」に通じるものなのでしょうか。私は、この、子ども心に「豊かさ」を持たせるということが、今日の教育にあまりにも欠けているように思えます。

なにもかかも便利になり、便利なものならんでも、

深い思慮なしに子どもに与えずぎてはいないでしょうか。その結果、便利な道具や制度が、子どもたちの工夫する心や活動する物を奪つてしまつたということはないでしょうか。子どもたちの心には「豊かさ」どころか、貧しい風が吹いているように思えてなりません。

育てる会の野外活動は、こうした考えに立つて宿泊施設から活動の一つひとつにいたるまで、できるだけ「不便利」な場所、「不便利」な方法を志向しています。過去の野外活動の中で、時として設備の整つた宿泊施設を利用した場合「育てる会らしくないな」と、子どもから言われたことがあります。やはり長年、会の活動に参加した子どもたちは、不便な中で暮らすことによつて得られる「心の豊かさ」の味を知つたのかもしれません。

金や物が乏しいということは、度をこすと、やはり、人の心を貧しくします。長い人生経験をお持ちの方なら、恐らくおわかりいただけると思います。しかし、金や物が豊かであるということは、決して心の豊かさに通じないこともわかりました。

それよりむしろ、乏しいからこそ得られる「心の豊

かき」があるのではないか、ということをごここで訴えたいのです。

今日の子育てにおいて、われわれおとなは、子どもたちに、心の豊かさを与えるため、効果的な「乏しい場の設定」を工夫する必要があると痛感するのですが、いかがなものでしょうか。



豊かな時代の子どもたち

佐々木 直剛

二月のある日曜日、私は中学一年になる息子から、ねだられていたものがあつて、それを買いためるために、息子と一緒に歩行者天国でにぎわう新宿に出た。

日曜日くらいは、からだも精神も自由に飛翔したいと、通勤着の背広を着るのをやめて、セーターにジーンズという、およそ昭和ひとけた生まれには似つかわしくない服装で家を出たが、街ですれちがった若者は、私の服装をちらつと見て、にやりと冷笑した。

私の息子も、「お父さんと歩くとシラケるなあ」と、呆れるように嘆息した。

街中は若者でごったがえし、商店街はにぎわつていて、ここには昨今の不況感、あまり見られなかった。しばらく歩き、駅前の交番前まで来たとき、私は三十年も前のことをふと思い起こした。

それは、息子と同じ中学一年の頃だった。戦争が終わり、疎開先からひとりふたりと友だちが焼け跡に戻ってきて、トタンのバラックのなかでの生活がはじ

まった。みんなやせ細っていて、目ばかりギョロギョロしていた。服は満足な物はなく、靴はぶかぶかな軍履を平気で履いていた。

その頃、どこの帰りだったか記憶は定かではないが、新宿駅に降りたことがあった。駅から都電の停留場に向かう途中、電車賃が足りないのに気がついた。困った。夕やみが迫り、どうしようかと心細くなったとき、駅前の交番に親切そうなおまわりさんが目にとまった。

「そうだ。おまわりさんにお金を借りることにしよう」。そして交番の前を何度か行き来した後、意を決して、ことの次第をおまわりさんに話した。当時、駅の周辺には、浮浪者がたくさんたむろしていて、その仲間とみられたのか、住所、学校名、親の名前をこまかく聞かれたが、ようやく納得してくれて、電車賃を借りることができた。

当時の新宿は、空襲の焼け跡が随所に見られ、いま新宿で有名な大書店も、まだバラックで、ほそぼそと営業をやっていた。あの時の交番も、たしか今の場所ではなかったと思いながら、お金を借りて一目散に都

電の停留場に小走りに走る少年の頃の私をふと頭に浮かべていたら、息子に「早くデパートに行こうよ」とせきたてられ現実に戻った。

息子の欲しいものは、今はやりのテレビゲームであった。デパートに行つてみると、高いものから安いものまで種類が多かったが、手ごろで安いものを選ぶことにした。息子はだいぶ不満そうであった。

思えば、この三、四年、息子にねだられて、いろいろなものを買つて与えた。息子は、切手からはじめて、それもほどなくあきてしまい、鉄道模型に移った。それもわずかな間だった。次は外国放送をキャッチするBCCLラジオ。それからラジオカセットに移り、今度のテレビゲームになった。

息子は、いつも新しいものが欲しくなると「お父さん、クラスみんなが持っているんだよ」と言った。それで買ってしまうのだから、実に甘い親なのである。会社に行つて、息子がラジオカセットを欲しがつていると話したら、会社の友人は、「実は、ぼくのところもせがまれていて、このあいだ買ったんだよ」と言っていたから、甘いのは私だけではなさそうだ。

それらのものが子どもにとって充分活きたものとして活用されたならば、それは良いことだと思う。たとえば、記念切手を例にとれば、その図案から、美術に対する関心を深めたとか、切手の保存から、几帳面に整理する方法を体得したとか。しかし、こう次々新しいものを手にするようでは、充分こなさないうちにあきてしまうことになる。

戦争直後、私たちが少年の頃、物がなにもなかった。それでも焼けた跡からなにかを探してきては工作をほどこし、ひそかに喜びを覚えた。その後、二、三年経って、物が少し出回るようになった頃、人に教わって鉱石ラジオを作ってみた。この素朴なラジオのヘッドホーンから小さな声が出てくるのが不思議で百倍も嬉しかったものだ。

そんな喜びを今の子どもたちには、わかってもらえるだろうか。今の子どもたちは買ってもらって当たり前という顔をする。だから、捨て去ることもいとも簡単なのである。

しかしだからといって、今の子どもたちを責めるわけにはいかない。企業は子どもの買いそうなものを

マーケティングし、次々需要を創造する。だから問題はむしろ大人側にあるのである。

ところで、いま世の中は大きな様変わりになさかっている。好きな言葉ではないが、低成長とか減速経済とか言われるのがそれである。いままでのように、子どもになんでもかんでも買い与えるという風潮は、この際、大いに反省していいと思う。

窮乏感の経験のない彼らに、なんでも手に入ることが決してしあわせではないことをこの際教えてやりたいと、つくづく思う。



物の大切さをおしえてほしい

依田 由美子

保育園にて

今日もお昼寝のあと、迷子の靴下が一足。「これだーれの?」と高くかかげてみせても、みんな首をかしげるだけで持ち主不明。かわいい紺と赤のダンガラ模様なのだが、いくら見ても名前が書いてない。もつともこんな色合いでは、記名するにも書きようがないかもしれない。

「お名前もなくてかわいそうな靴下ね。みんな、自分のには、ちゃんと名前書いてもらつてね」

「ハ―イ」「ハ―イ」

「ボクのは、書いてあるヨ、ホラ」と小さい足をあげてみせてくれたのは、白い靴下の土ふまずにマジックインクでハッキリ書いてある。

「ぼくのも…」といった〇〇君のは、迷子と同じような縞模様だ、

「どれどれ」と近くへ寄つて見ると、ナルホド、白い糸でキチンとぬいとりがしてある。お母さんの心づ

かいが目に見えるようだ。

こうして記名があれば問題ないが、近頃の子どもの身のまわりは実にカラフルなのだ。それだけに記名のしようがなかったり、同じような品ばかりなので、落し物は靴下、手袋のような小さい物から、肌着、セーター、ズボンまで迷子になったら、小さい子どもが判らないのは無理ないとしても、お母さん方だつて「うちのらしいけれど…」ということになってしまう。黒板に「誰のでしょう」と書いていく日も下げておいても、ちつとも持主はあらわれない。仕方なく戸棚にしまつておくと、しばらくして「うちの〇〇が一枚、無いのですけれど…」と言ってくる。

お母さま方、どうぞ記名を忘れないで下さい、そして、見てくれのかつこよさや流行にとらわれない「良いもの」をお子さん方にも教えて下さい、と願わずにはいられない。

毎日、肩にかけてくるカバンだつて、布製で軽いのは良いが、マチが浅く、弁当箱とお手拭きのタオルを入れるといっぱい。泥あそびで汚れたズボンをつめこむと口がしまらない。無理すればファスナーにひつか

かる。それでもカッコ良いのか、同じカバンがズラリと並んでいる。差込みの紙の名札は、すぐなくなってしまうので、どれが誰のかわからない。中身も同じようなお弁当箱…、フタの上に極彩色のマンガが書いてあって、包んであるハンカチもまた、テレビでおなじみの主人公たち…。

子どもたちが流行を追うことに問題があるのか、ほしがるままに買い与えることを考えねばならないのか。

一時、オマケのカードほしさに袋菓子を買い、菓子の方は手もつけず捨ててしまう、というのが問題になったことがあったが、物の価値観がおかしくなっているようだ。

私などは戦中戦後の欠乏時代を経て来たものだから、紙一枚でもまず、勿体無いが先に立ち、空箱や紙袋など何でもしまいこむほうで、チラシ広告の裏の白いは綴じてメモ用紙に、梱包用の紐で買物袋や植木鉢を吊るす網を編んだり、再度お役に立ててみては、娘に「いじましい戦中派」と笑われる。

何だ一つ一つの品物には、その役立つ使命があるはずなのに、それをまっとうさせず、ひところの「消費

は美德」におどらされて、気軽にポイと捨ててしまう風潮は空おそろしい気さえする。

物を大切にする、ということは、あらゆるものに対する「思いやり」だと思う。どんなものにでもそれを産み出すには幾多の人の手を経ていることを是非、教えてほしいな、とつくづく考えるこの頃なのである。



再掲載を受けて――

お母さん、私、生の人参食べたんや

野高 健司

サバイバル活動でのエピソード

育てる会のサバイバル活動は、参加者が「自分のことは自分でする」ことを原則としていて、大人は見守り役に徹します。春、夏、冬のサバイバル活動それぞれに数えきれないエピソードがありますが、ここでは「乏しさ」という、ことを聞いて強く思い出される出来事を紹介します。

今から十五年ほど前の夏のサバイバル活動は、私が経験した中でも指折りの悪条件下で行われました。活動前は雨続きで地面も木もすっかり湿っていて、活動中も連日強い雨に見舞われました。三泊四日のキャンプ中、火を起こすことができず温かい食事に取りつけない班が多かったです。

このときの参加者の一人の小五の女の子は、大阪での

解散時、迎えに来たお母さんに「お母さん、私、生の人参食べたんや」と泣いて抱き着いたのです。私はそれを目の当たりにして、小学生の子までにこんなに過酷な体験をさせる私たちに対して親がどのような思いや印象を持つのだろうか、と不安に駆られました。

しばらくすると、このお母さんからお手紙が届きました。子どもを大変な目に遭わせたことに対しての不満や抗議ではないかと思い、恐る恐る開封すると、その内容は正反対のものでした。そこには、「子どもが食べ物でひもじい思いをしたのは生まれて初めてのことでした」「テントの中で、生の人参に味噌をつけて涙ながらに食べたそうです」「こんな貴重な体験をさせていただきありがとうございます」と感謝の気持ちが綴られていたのです。

ただ、いくら有意義だったとはいえ、子どもにとっては、ただただ辛い体験だったはずですから、もう二度と育てる会の活動に参加することはないだろうと思っていました。ところが、その二年後、その親子から長期山村留学の願書が届き、翌春には八坂学園に入園していました。結局、その子は翌年も継続をして、中二、中三の二

年間を八坂で過ごしました。

そんな彼女も今は一児の母です。いつか、あのサバイバル体験にどんな思い出が残っているのか直接聞いてみたいと思っています。

育てる会、サバイバル班の活動への願い

サバイバルキャンプ終了後、活動を振り返った時に多くの子どもから聞かれるのが「今まで当たり前だったことが当たり前でないことに気づいた」という声です。先ほど紹介した女の子も、活動後に書いた作文の中で、「今まで、食事は時間になると必ず出てくるものだったけど、サバイバルキャンプでは、そうはいかなかった」「食事の大切さがわかった」と振り返っていました。これは、「乏しさ」を体験しなければ、身に染みて感じることでできなかったことだと思っています。

ところで、日本は世界の中で国民の幸福度が非常に低く、先進国の中では最低です。これは生活の豊かさが人の幸福度に必ずしも結び付いていないことを如実に物語っています。

向上心を持つことは大事だと思いますが、これが誤っ

た方向に向かっていけば、「まだ足りない」「もっと豊かに」という欲ばかりが膨らんでしまい、いつまでたっても人の心が満たされることはありません。

私たちの生活は、これからますます厳しさを増していくかもしれません。経済の低迷や格差、気候変動、食糧危機など向き合わなければならない課題が山のようにあります。だからこそ、モノの豊かさばかりを追い求めるのではなく、「足る」を知り、日々の生活、日常の中に感謝や喜びを感じることに出来る人を育てていくことが大切だと思うのです。

育てる会は、まさしくそういった教育活動を実践している貴重な存在です。いつまでもこの理念を守り続けて、心豊かな子どもたちを育てて欲しいと願っています。

の だ か ・ け ん じ ……………

育てる会元職員。現在は青森で登山ガイド業と農業に従事。日本山岳ガイド協会公認登山ガイド、北東山岳ガイド協会会員。SOW Mountain Guide 主宰。(sowmtnguide.com)

